
遥か彼方

さすらいのかえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遙か彼方

【Nコード】
N9347B

【作者名】
さすらいのかえる

【あらすじ】
クラスの中で人気者の男の子と孤立していた女の子。一緒にクラス
の委員に選ばれて・・・

その1

「いや」

「……」

「やめて」

彼女は、手を握ろうとした俺の手を振り払った。

「なんで？」

彼女は、イヤイヤするように、ただ首を振るだけだ。

俺は途方に暮れるだけ。ここから俺たちの距離が広がった。

彼女との出会いは、一学期のクラスの委員長を決めるとき。

俺は昔からなぜか人に好かれ人気があった。

誰に対しても、気楽に声をかけられるし、楽しく話をするのは得意だ。

いつも俺はクラスの人気者のポジションにいた。

そんな俺だから、クラスの委員長に推薦され、いつの間にか委員長になっていた。

そして、いつの間にか副委員長になっていた女の子がいた。

その時、クラスの中で唯一話した事が無い子が、その女の子だと気付いた。

その後ホームルームは、つつがなく終わり。クラスの皆は帰り支度を始めた。

俺は軽音部に入っているのだが、今日は部室にいく前に彼女と話した方が良いよな〜と思う。

まだ机に座っていた彼女に話しかけてみた。

「はじめまして？」

「……」

「これから一緒にクラスの委員をやるわけだから仲良くなった方が
良いと思うんだ」

「……」

俺は人と話すのが得意だと思っていたが、勘違いだったようだ。
彼女とは、どう話していいかわからない……。

「えーと俺の名前は知ってるよね？」

彼女は、こくりと頷いた。

やっとコミュニケーションがとれた。

記憶に残っていた彼女の名前を言ってみた。

「黒川さんっであってるよね？」

また彼女は、こくりと頷いた。

今の所、俺は彼女の声を聞いていない。

「下の名前はなんて言うのかな？」

「……」

とても小さな声で彼女は言った。

「○○○」

「え？」

彼女は鞆からメモ帳を取り出し。それに、名前を書いた。

「あゝあさみね」

「俺の下の名前は知っている？」

首を振る、彼女。

俺は、彼女が持っているメモ帳に、自分の名前を書いた。

そんなやり取りをしていたら、いつの間にか二人で喋りもせずに
メモ帳を交換しながら夢中で筆談をしていた。

俺は彼女のプロフィールから家族の事までかなり詳しくなった。

彼女も俺の事を、同じくらい詳しくなったと思う。

そして、外は暗くなり下校時間になっていた。

「そろそろ、下校時間だよ。帰る？」 かきかき。

「そうだね。帰ろう」 サラサラ。

俺たちは、家に帰る事にした。

そして学校の校門出た時に、彼女は突然笑いだす。
びっくりして彼女を見る俺に彼女はこう言った。

「あんた変わってるね」

きれいな声だった。

その2

「あんた変わってるね」

「……」

俺は、思考停止から脱出して言った。

「おまえもな」

本当に可笑しそうに彼女は言う。

「そのとうり」

その後一緒に帰るあいだ（俺と彼女の家は、結構近かった）。

彼女は、急に饒舌になった。彼女は目立つのを嫌い。クラスではできるだけ喋らない暗い子を演じていたらしい。

だが、クラスの一部の女子に目を付けられ。嫌がらせとして、副委員長に推薦されて、そのまま押し付けられてしまったのだと言う。

女子って怖い。

筆談の事も聴いてみた。

「なんで、喋らないで紙に名前書いたの？」

「喋る気力が無かった」

「まんまと副委員長なんかさせられて、バカみたいじゃん私」

「なるほど」

委員長にさせられた？俺もバカ確定か？

「せっかく目立たないようにしてた私はなに？」

「まだ本性ばれてないから平気では？」

「そう？」

「なんで、目立ちたくないのかわからないけど、俺がばらさなければ、目立たない副委員長できるよ」

「そうかあんたをやっとけば良いのね」

そのやるは殺か？

俺たちは、急に仲良くなった。

「黒川って猫かぶりうまいね」

「家でやってるからかも」

「そうなの？」

「年期はいつてるからうまいよ」

本当にうまい二重人格と思った……なんて言えない。

そして、帰り道を色々な話をしながら帰った。楽しかった。あっという間に彼女の家に着いてしまった。

黒川の家の前で、彼女が別れぎわに言った。

「ごめんね、部活サボらせて」

「あ！」

この時になって、ようやく俺は今日部活に行くのを忘れていた事に気付いた。

「大丈夫だよ」

「そう？ ではまた明日ね」

「んじゃまた」

と言いつつ俺は、明日メンバーにどう言い訳するのかを考えつつ家に帰った。

その3

衝撃の事件から次の日の放課後。

俺はあれから、特に良い言い訳も思いつかずに、今部室の音楽準備室に向かって歩いていった。

ちなみに彼女は普段どうり？に猫をかぶっていた。話しかけられる雰囲気はなかった。

さすがだ。

それにしても、無断で休んだのはまずかった。

俺はボーカル兼ギターをやっている。俺がいないと練習にならない。

休んだ理由が、俺が唯一クラスの中で話した事無かった彼女と、筆談に夢中になって時間を忘れ、その後、彼女の本性を知って仲良くなったなんて……本当の事だが誰も信じないだろうし……。

だからだと考えていたら、部室についてしまった。

ドアを開けると、つるちゃんがいた。つるちゃんとは部活の顧問で音楽教師の鶴岡先生の事だ。

先生になって3年目で若い。そして、ほとんどの生徒は、先生などとは呼ばずに「つるちゃん」と呼んでいる。

「おい、昨日は何で来なかったんだ？」

「原も松田も待ってたんだぞ」

早速つるちゃんから突っ込まれた。まず、つるちゃんの質問に、答える前に名前が出てきた二人を紹介しよう。

原俊介はらしゅんすけベース担当で俺らのバンドのリーダー。

部屋の中でベースまっただひさしの練習をしている。さすがリーダー真面目だ。もう一人が、松田久志まつたひさしドラム担当。

今、奥のドラムセットの椅子で寝ている。器用なやつだ。

そして、ボーカル兼ギター担当の俺をあわせて、この3人が部活の全員でバンドのメンバーだ。俺たち3人で軽音部を作った。

遅くなったが、つるちゃんに対して答えよう。

「何となく？」

バシ！

「いて」

つるちゃんに殴られた。

その4

「いて」

つるちゃんに殴られた俺に同情したのか俊介が弾いていたベースの手を止めて話しかけてきた。

「こいつは、結構口ではいい加減な事言うけど、無断で休むやつじゃない、何かよっぽどの理由があったんじゃないかな？」

と、こちらを向きながら言った。その不敵な笑みは何ですか？

俊介……。

「ほーよっぽど理由か、で何があったんだ？」

つるちゃんまで何それ、二人揃って俺をいじめて楽しいですか。

「べ、別に無いよ。サボりたかったから、休んだだけだ」

「へへ」

「ハモルなその二人」

やれやれという、雰囲気を出しながら俊介が言った。

「まあ、どこかの副委員長の話は言いたくなければそれで良いよ」

「……」

何で知ってるんだこいつ？ さ、さすがリーダー？

「ん？ なんだその副委員長というのは？」

つるちゃん興味津々だし。

「あゝそれは「練習しよう」」

俊介の言葉を遮って（ナイス）いつの間にか起きた、久志が言った。

その声を切っ掛けに、俺たちは練習を始めることにした。俺のサボりの理由は結局どうでも良いらしい。

部活が終わるまで、つるちゃんだけが、副委員長ってだれ？ とぶつぶつ言っていた。

そして、練習を終わり俺たちは学校を帰る事にした。俺たちは帰

るときはいつもバラバラだ。

俺はどこに寄り道もせずに戻るのだが、二人はバイトやら遊ぶのに忙しいらしい。

どっちが、バイトで忙しいのか、遊ぶのに忙しいのかは、想像にお任せする。

一人で校門を出ようとする俺の横から声をかけてくるやつがいた。「おい！」

見ると黒川だった。

その5

彼女が、少し怒った風に言う。

「普通気付くでしょ？」

「……」

何となく無視してそのまま歩いてみる。

「ねえってば」

「なに？」

俺は気付いた、昨日の事なんて何も無かったようにクラスにいた彼女に対して、何でだか腹が立っていたのだ。

「何で無視するの」

「無視してないし」

「まあいいや、こっち向いてくれたから」

「……」

俺たちは、昨日と同じように一緒に話しながら帰る事にした。

今の彼女は、やっぱりクラスの中の彼女とは別人に見える。

「ほんと黒川の猫かぶり凄いよな。けど、俊介に、あ！クラスの原の事ね。俺と黒川の事で何かあったと感づかれた」

「あんた、私の事見過ぎ。だから気付かれたのよ」

「な、なるほど」

たしかに今日俺は、黒川の方をよく見ていた気がする。少し不安になってきた。

ん？ 俺が見てたの知ってたのか？

「他のやつにも気付かれたかな？」

「あんたが、私の事を見ていたからといって、私の猫かぶりがばれるわけじゃない」

「あ、そうか」

冷静なツツコミだ。何だか不本意そうに彼女が言った。

「変に勘違いした人はいたかもね」

「ん？ 変って？」

「はぁ～いいよもう」

ため息つかれた。うやむやのまま、この話は終わりになったよう
だ。

彼女は、話を変えるように言った。

「今日の連絡があった委員会の事なんだけど」

「そんな事もあったね」

「……」

彼女は何だか不満そうだ。その後、彼女の家に着くまで、委員会
の事務的な話をした。

月一の集まりをどうするかなど、つまらない。

そして、彼女の家に着いた。何か残念だ。

「また明日ね」

「ん～じゃ～ね～」

彼女と別れ、家に歩きながら思った。

また明日学校で、彼女は暗い女の子を完璧に演じるのだろうか？
さっきまでの彼女の方が良いのにな～どうにかならんのかな。

明日、少し怖いが学校の中で話しかけてみるか。うむ。そうしよ
う。

それにしても、今日なんで待ってたんだ。

委員会の事話したかったのか……謎だ。

その6

学校で彼女に話しかけると決心したが、俺はまだ話しかけられないでいる。

あれから今日で一週間ほど経った。

今の時間は、もう少しで午前の授業が終わりになって、もうすぐ昼休みになろうとしていた。

俺がなぜ話しかけられなかったか、俺が観察した彼女の一週間の状況を授業がつまらないし振り返ってみよう。

彼女は授業中以外はいつも自分の席で、ウオークマンで音楽を聴きながら本を読むという、完璧にあたしに話しかけるな！という態勢だった。

この態勢は、このクラスになって、ずっと同じらしい。

この一週間だれも彼女に話しかける人はいなかった。そう俺も同じくできなかった。

始めの頃は、多分彼女に話しかけた人がいたのだが、「……」攻撃に負けたのだろう。

俄然燃えてきた。

彼女の鉄壁の防御を崩したい。まあ一回は崩したんだけど、あれから一緒に帰る事も無く幻だったのでは？ と、俺は思い始めていた。

あ、チャイムが鳴った。だらだらと一週間の出来事を振り返っていたら。授業が終わったらしい。昼休みになった。

今日は学食で何を食べようかと考えていたら、俊介が話しかけてきた。

「何この頃、黒川のこと見てんだ？」

俺の視線の先を読んだらしい。それにしても、なんだそのニヤニヤ笑いは？

「別に見てるけど」
開き直ってみた。

「たしかに黒川は美人かもしれんが、性格があれじゃあな」
んゝ黒川が美人？　そう言われてみれば、整った顔かも！
確かに美人だな。

「なるほど」

「何そこで感心してんだよ」

「他に情報ないの？」

「えゝと、かなり頭がいいらしいぞ」

「まじで？」

「学年で常に3番以内だと、まあ噂だけどこれは本当っぽい」
たしかに頭よさそうな顔もしている。

「なるほど」

「……おまえ何見てたんだ？」

「さあ？」

「まあいい、昼飯食べに行こう」

「おう」

その時、彼女が鞆から弁当を出して教室を出るのが見えた。どこかに食べに行くらしい。

「あのさ、これから昼飯久志も誘うんだろ」

「そうだけど、いつもだろ？　なに？」

「俺今日止めるから二人で食べてくれ」

「了解。まあ、がんばれ」

「は？」

「いいから行けよ。俺は久志とこ行くから」

なんだか良くわからないが、俺は彼女を見失いそうなので、返事もそこそこ教室を出た。

その7

教室から出ると、彼女の後ろ姿が見えた。追いかける。

階段を上って行くようだ。後ろから付いて行く。スカートの中は

……見えなかった。

男ならしょうがないのだと誰かへ？ 言い訳してみる。

彼女の行き先がわかった。多分屋上に行くのだと思う。屋上にはいくつかベンチが置いてあったはずだ。

俺は一応気付かれないように付いて行く。

彼女が屋上の扉を開けようとした時に、俺に気付いて振り向いた。俺を見下ろすと、不機嫌そうに彼女が言った。

「見た？」

「いや見えなかった」

言ったあとと思ったこの返答はダメダメだ。

「そう」

彼女は、特に俺の返答を気にせずにドアを開けて外に出た。

俺は残りの階段を3段飛ばしに一気に上り彼女を追いかける。

ドアを開けて外に出ると、彼女は空いているベンチに座ろうとしていた。

周りを見渡すと、何人か昼ご飯を食べている生徒はいるが人数は少なくて、その中に俺が知っているやつもクラスの連中もいなかった。

うちの学校は学食が安くて美味いと評判だったりする。

そのせいで、弁当やパンなどを買って食べるのは少数派だ。

それにしても静かなこの雰囲気はいいかも、穴場発見だ！と喜んでいる場合ではなかった。

彼女の所へ向かう。

「元気だった？」

自分でこの声の掛け方は違うかと思う。

さっきから俺は、彼女の前だと自分のペースが乱れっぱなしだ。

「ん？まず、座れぼ？」

あれ？いつもの猫かぶりの彼女じゃない。

俺は疑問に思いつつ、彼女の横に座った。

「何か用があったの？」

何で俺は、彼女を追いかけたんだ。

あ、学校の中で、話をする為かもう達成したなこれ。

「あったけど、もういいんだ」

「ふん」

ぐくく…俺の腹の音が鳴った。あゝヤバい何も食べるもんが無い。

自分のお弁当を差し出しながら彼女は言った。

「良かったら食べる？」

「食べる」

即答した。

彼女の弁当を半分もらい食べる事にする。

弁当をがつついて食べる俺を見て、笑って彼女は言った。

「犬みたい」

手を差し出しつつ俺が言う。

「ん？お手でもする？」

「…しなくていい」

「りょうかい」

弁当を食べ終わったあと、残りの昼休みの時間彼女と話をした。

「そろそろ、時間だから先行くね」

「おう」

先に教室へ戻る彼女の後ろ姿を見ながら思う。俺が話しかけられなかった一週間は何だったのだ。

明日から教室の中でも、彼女に話しかけようと思った。

その8

屋上で弁当を彼女から貰って、一緒に食べた翌日。

朝クラスに入ると、彼女はまたいつもと同じに自分の席で、音楽を聴きつつ本を読んでいた。

クラスの中でぽつんと一人いる感じ、彼女の周りだけ、別の空間にいるようだった。

俺は、彼女に近づいて行く、目の前にきても気付かない。

何を真剣に読んでいるのかちよつと気になる……まあそれは置いておこう。

彼女のイヤホンを取って言う。

「おはよう」

彼女は、ビックリしていたが、条件反射なのか返してくれた。

「お、おはよう」

俺は何も無かったように自分の席に向かう。何か皆が、俺の方を見ていた。

クラスがざわついている。俺って凄い事したのかも、今更実感した。

その後、この事は、クラスの男子たちにすげーなどと賞賛されたりした。頑張ったかいがあった。

それは置いといて、これを切っ掛けに彼女は、クラスメイトたちに対して、普通に話しかけられた時は答えるようになった。猫はかぶったままだったけど。

そして、俺と彼女の関係も、委員会の仕事が増えた事もあり近づいていった。

俺と二人っきりの時は、猫を脱ぐのが当たり前になった。

昼飯と一緒に食べたり、帰りに話しながら一緒に帰る事も増えた。そして、二人の時は、彼女が笑う回数も増えた気がする。

だけど、この頃だろうか彼女に対しての悪い噂がたつようになったのは……。

俺はその噂を知らなかった事に、あとで後悔することになる。

その9

彼女と出会ってから、半年が経った。

そして、今は文化祭で、俺たちのバンドの演奏が終わったあと。

「俺の歌聴いてくれた？」

「うん。意外と歌上手かったのね」

「意外かよ」

「上手かったって、で、格好良かったかもね」

「かもねかい。もう少し素直に誉めてもいいんじゃない？」

彼女が笑顔で言った。

「調子乗るからやめとく」

ヤバい可愛い。最近俺は、彼女の事を意識しまくっていた。

少し前までは、そんな事は無かったのにな。

そして、彼女は俺の事を信用しきっているようで、無防備だった。

俺は男だというのに……。

最近彼女は、学校で笑う回数が増えた。

その結果、男たちの間で黒川人気が上がりまくりだ。

やってられん！

俺と付き合っていると言う噂も有ったりするらしいが、彼女との間には何も無い。

さらにやってられん！！

メインイベントだった（ほんとだよ）、俺たちのバンドの演奏も終わり。

文化祭が終わろうとしていた。

「あゝ片付けめんどくせー」

クラスの委員長と副委員長は、片付けなど色々忙しいのだ。雑用係なのでは？　ほんと。

彼女が笑顔で言う。

「まあそう言わずによろしくむかつくけど」
こ、怖い。さっきの笑みと違うよ。

「そ、そうだね」

暗くなってきた。やっと終わりそうだ。委員長なんて引き受けるんじゃないかった。

けど、隣を見ればそんな考えも吹っ飛ぶね。やっぱり引き受けて良かった。うんうん。

そこ！？　男ってとか呆れないように。

「こんなもんでいいじゃない？」

「そうだね。先生に報告して帰ろうか」

つるちゃんのOKのサインが出て、俺たちは帰る事にした。

その時、廊下の窓から綺麗な夕日が見えた。

歩くのを止めて、彼女がつぶやくように言う。

「綺麗だね」

俺は、夕日ではなく彼女を見ていた。夕日に照らされる彼女は、綺麗で可愛かった。

心臓が跳ねる理性が飛ぶ。無意識に彼女の手を握ろうとした。

「いや！」

「……」

「やめて」

彼女は、手を握ろうとした俺の手を振り払った。

「なんで？」

彼女は、イヤイヤするように、ただ首を振るだけだ。

俺は途方に暮れるだけ。

何が駄目だったんだ。彼女は自分の手で自分の肩を抱いて、怯えるように俺を見ている。

その視線に耐えられない。俺は彼女から逃げ出す。

全速力で走った俺は、いつの間にか自分の部屋のベットに倒れ込んでいた。

その10

あの日から一ヶ月が経っていた。

あれから、俺は彼女とは話をしていない、視線も合わせてない。時間だけが過ぎていく。彼女はクラスでまた話をしなくなった。俺のせいなのかな。やっぱり。

少し前のように暗くなったが、それでも黒川の人気は落ちなかった。

聞こうとしなくても彼女の噂？情報が聞こえてくる。

例えば、自転車通学になったらしい。とか俺が彼女に振られた。とか……最悪だ。

最近クラスの女子とうまくいってないように感じるのは気のせいだろうか。

前から仲悪そうなのだが。こんな事考えているとおり、俺は……。

「おい、最近元気ないな？」

俺の考え事を中断するように、俊介が話しかけてきた。

「別にそんな事無いけど」

「……まあいいや、飯食べにいくぞ」

「おう」

いつの間にか、昼休みになっていたらしい。ぼくとし過ぎかな。途中で合流した久志も一緒に学食で昼飯を食べる。

いつも思うが久志食い過ぎ、確実に3人前以上食べてる。

あゝだからバイトしてんのか今疑問が解決した。

食べ終わった俊介が話しかけてきた。

「そろそろ、新曲作りたいんだけど、次の番はおまえだろ」

俺たちのバンドの曲作りは、詞は皆で考えるのだが、曲は順番に作っている。

最終的には俊介がアレンジすることになる。

俺が返事を返す前に俊介が言う。

「さっきも言ったけど、おまえが元氣無いとうちのバンドは、はじまらないのだよ。文化祭の日何があったか知らないが、ぐちぐちしてないで、決着付けろバカ」

「バカは余計だ」

でも、俺は、この一ヶ月の間、彼女からただ逃げてきたのは確かだ。

「久志も何か言ったれよ」

俊介は久志を味方に付けたいらしい。

重々しく久志が言った。

「まあ、これでも食え」

久志はデザートに買ったらしいプリンをくれた。

「ありがとう」

俊介は、久志の行動に苦笑していたが、俺は結構嬉しかった（プリンは好きだけどそういう意味ではない）元氣が出た。

照れ隠しに、

「このプリンに誓っていい曲をかく」

と宣言してみた。

「「ちがうだろ」」

俊介とつるちゃんに、同時にツッコまれた。いつのまに居たのつるちゃん！！

「ハモルな」

んゝバカやってると元氣出るなゝ。

ぐちぐち、ぐだぐだはやめて、彼女から逃げるのもやめようと思った。

その11

俺たちは昼飯を食べ終わり自分の教室に向かっていた。近づいていくと教室の中から険悪な話し声が聞こえてくる。

あとから聞いた話だと、始めは些細な事だったらしい。聞こえてくるクラスの女子の言葉がエスカレートする。

「最近調子乗ってる子がいるよね。私は、知っているんだ。父親から殴られたりしてるみたい。彼女は可哀想な子なんだよね」

いつもは、どんな言葉にも何も反応がなかった彼女が震えて泣いていた。

彼女は泣きながら言った。

「私は可哀想なんかじゃない！ あんたに何がわかるのよ」

「虐待されてるからって可愛そうなの？ よっぽどあんたの方が、可哀想じゃない」

丁度学食から帰ってきた俺は、廊下で全て聴いてしまった。

何でこうなったのだろうか。何で誰も止めないんだ。教室に飛び込むように入る。

「おまえら全員最低だ」

守れなかった自分も……。

彼女に向かって歩く。何で彼女は泣いてるんだろうか。俺はもう逃げ出したくない。

「もう絶対に離さない」

俺は彼女の腕をつかんでそう言った。そして、引きずるように教室から連れ出す。

無言で歩く俺たち。昼休みの終わりと授業の始まりのチャイムが鳴る。少し経って沈黙を破るように彼女が言った。

「い、痛いよ」

「あ、ごめん」

腕を掴んでる力を緩めて、手を繋ぐようにする。彼女は特に拒否

しなかった安心した。

「ねえどこいくの？」

「……」

何も考えてなかった。けどいつもの癖なのか、自然と音楽室に向かっていた。

質問には答えずに、このまま黙って音楽室に向かって歩く。

音楽室に着いた俺は、つるちゃんがいるか呼んでみる。

「つるちゃん」

音楽準備室から声が返ってきた。

「おう、開いてるから勝手に入れ」

許しが出たので、軽音部の部屋にもなっている準備室に勝手に入る。

つるちゃんは、俺たちを見ると、座っていた椅子から立ち上がる。

「変な事するなよ」

笑いながら言うと、外に出て行った。二人つきりにしてくれるらしい。

ドアが閉まる時にあれが副委員長かとおつぶやいていたのが気になる。

部屋にあるソファに座る事にする。二人ならんで座って、横を向いて彼女を見る。

何だか久しぶりに彼女を見たような気がするな。彼女はだいぶ落ちついたようだった。

その時、彼女が腕をさすりながら、なんだか嬉しそうに言う。

「痣になっちゃったね」

彼女の腕には俺が強く握ったせいで、その部分が赤く痣になっていた。

「あ、ごめん痛かったよね？」

彼女は微笑んで言う。

「平気」

やっぱり笑った顔は可愛い、久しぶりに見たかも。

彼女が一つ息を吸い込んで、呼吸を整えて決意したように言った。

「ごめん、あの時拒否した」

「もう知っているかもしれないけど……」

そう一つ前置きをして、彼女は、自分の家庭の事や彼女自身の事を話してくれた。

いつの頃か彼女の父親は、彼女や母親に対して暴力を振るうようになったらしい。

家では良い子にしていないと、さらにひどい事になる為に家では仮面をかぶっていたようだ。

その父親の事で、男に触られるのが怖いのだと言う。俺はそれを黙って頷きながら聴いた。

「急に触られると特に駄目なんだ」

「俺さっきおもしろいきり急に腕掴んだような気が」

「んゝ何か平気だった、怖いとか思う暇なかったかも、ほんとビツクリした」

彼女は微笑みながら、俺の言葉を遮って言う。

「ごめ「でも嬉しかったよ」」

繋いだ手をぎゅーと握ってさらに言った。

「だから謝らなくていい」

「うん」

「こうしていると安心する」

彼女が言う。そのまま目を閉じて寝てしまった。

この状況をどうしたらいいんだと心から思う。

でも、繋がれた手と彼女の寝顔を見ると幸せを感じた。

その12

彼女が寝てからだいぶ時間が経った。

今日の午後からの授業とかいっただうなっただろ。見事にサボったな。

あいている方の手で、彼女の髪の毛をくるくるしながら遊びつつ、ぐだぐだ俺が考えていると。

「ん」

彼女がもぞもぞと動き出した。あーやっと起きたよ。

俺は起こさないようにしていたので、身動きが取れずに体がカチカチになっていた。

まあとくに飽きなかったけどね。

彼女は目を開けると、キョロキョロと周りを見渡す。状況を思い出したらしい。

彼女の頭は起きて数秒で正常に動きだした。

寝惚けたりしたら、もっと可愛いのにと思った。

「ん」よく寝たかも。最近ずくと寝不足だったんだよね

「そうだったんだ」

彼女が可笑しそうに言った。

「誰かさんが、無視するし目も合わせないし」

「お互い様だろ」

「まあね」

「ん」じゃあ帰ろうか

「いいの？」

「だって俺今日はクラスに入るのやだよ」

「あ」

何か色々思い出しているようだ。

「すまんね」優等生をサボらせて」

「そう言えば私学校とかサボった事無い」

「じゃあなおさら帰ろ」

「私の無遅刻無欠席が」

「俺が連れ出した時点でアウトだろそれ。諦めが肝心だ俺のように」

「あんたのは、諦め過ぎでしょ」

いつの間にか、へんなツボに入ってしまった二人で爆笑していた。

一頻り笑い終わった後、彼女の手を引いて俺が言った。

「行こう」

「うん」

その13

静かな廊下を二人並んで手を繋ぎながら歩く。

誰かに見つからないかドキドキする。

無事に誰にも会わずに学校の下駄箱についた。

「あゝ私チャリ通になったんだよね。知ってた？」

「知ってたよ。黒川の情報には男たちの間で凄いスピードで伝わるのです」

「なにそれ？」

「まあいいから、二人乗りで帰ろ」

俺たちは駐輪場へ向かって歩き出した。

歩いていると、彼女が楽しそうに言う。

「何にかサボってる感じがする」

彼女にとってサボる事はイベントのようだ。

俺にとっては日常……駄目だろそれ。

二人で話しているとすぐに駐輪場に着いた。ついに着いてしまった。

チャリに乗るには、ずくと繋いでいた手を離すしかない（実は彼女を連れ出してから繋いだままだった）。

俺は、一生の不覚だと思いつつ離し、彼女の自転車にまたがり言う。

「んじゃ行こう」

「は？」

「え？」

「私の自転車なんだから私が漕ぐから、あんたが後ろに乗れ！」

「命令かよ！ んゝなんか男が後ろって格好悪くない？ だから俺が漕ぐ」

えゝここで、どっちが漕ぐかどっちが後ろに乗るかで五分ほど揉めた。

このまま一生揉めるのかと思ったその時！

彼女の一言で、この時間に終止符をうった。

「後ろなら私に公然と抱きつけるよ」

にやりという言い方がぴったりの笑顔で彼女が言った。

俺は黙って後ろに乗る事にした。

んゝ男ってバカだね。ほんとどうしようもない。しみじみ。

その14

俺は、色々あって自転車の後ろに乗る事になった……。

き、気を取り直して、二人で一緒に帰るのは久しぶりだ。やっぱり嬉しい。

自転車を漕ぎだそうとした彼女が言った。

「ちゃんと掴まっててね」

「おう」

俺はおそろおそろ抱きつく。んゝ彼女の中で何かが変わったらしい？

それとも俺だけなのかな？

一度失っただけに、この彼女との時間が、より大切に感じた。

何となく彼女に聴いてみる。

「何でチャリ通にしたの？」

「できるだけあんたと顔会わせたくなかったから」

「な、なるほど」

凄い返答が帰ってきた。今の状況でなければ笑えないよそれ。でも嬉しいな。

もう少しで彼女の家だ。

「やっぱりチャリだと早いなくこれから俺も晴れの日チャリ通にするかな」

「じゃあ私の家寄ってよ。通り道だしいいでしょ？」

「いいけど、一緒に学校行くってこと？」

「今度は、後ろに乘りたい」

「なるほど、りょうかい」

彼女の家に着いた。俺は自転車から降りる。

「サンキュー重くなかった？」

「軽い荷物だったよ」

「に、荷物ね」

彼女は、笑いながら軽く否定する。

「嘘だって」

「じゃあまた明日、えーと明日は二人で学校行こうな」

「そうだね。入りづらいよね」

「二人で行けば大丈夫」

「うん」

離れがたい気持ちを振り切って、彼女に手を振ってから自分の家に向かう。

そして、俺が家に向かって歩いてすぐに、後ろから俺を呼ぶ声がした。

「けいご」

「やっと呼んでくれたな」

彼女は微笑みながら言う。

「そうだったけ？」

「んじゃまた」

「うん。またね」

<完>

おまけ。次の日の朝？

「けいご、おはよ」

「おう」

「黒川、俺も下の名前て呼んだ方が良いの？」

「別にどっちでも良いけど？」

何か不満そうだ。けど可愛い。

「もうちょい待って。心の準備がない」

「しょうがないな。楽しみにしてる」

そして、俺たちは自転車の2人乗りで学校へ行く。

番外編（前書き）

本編を未読でも読めると思うのですが、できれば本編読後に読んで欲しいです。その1とその2の視点を変えた話になっています。

番外編

遙か彼方番外編『仮の私くはじまりの時く』

学校への登校中、ふと、昨日の事を思い出してしまった。物や母に当たる父のものの音が聞こえた。私は自分の部屋で目と耳を塞いで嫌な時間が過ぎ去るのを待っていた。ただ逃げている私は卑怯者。あくだめだ。家での事は考えないようにしないと。学校ではただ静かにしていたい。目立ちたくなかった。

私は学校に着くといつも通りに自分の席に座って、MDプレイヤーで音楽を聴きながらお気に入りの作家の本を読む事にした。

新しいクラスになって一週間経ったが、私だけ孤立している。当たり前前だ、誰か話しかけてきても無視しているのだから、その事で女子の何人かに目をつけられたようだ。私は人と話すのが苦手だった。強がっているように思うかもしれないが、この静かな空間が楽だった。

私の席が、クラスの中で別の空間なら、違う意味で別の空間、明るい空間が一カ所ある。彼が居る所。彼はたった一週間でクラスの中心になっていた。誰とも仲良く話している。私は基本的に他人に興味は無い、けど、彼のことを知っていた。彼は去年の文化祭のステージで歌っていた。私はその声が好きだった。

そして、あるホームルームの時間、クラスの役員を決める事になった。彼は、皆から推薦されて委員長になったようだ。なぜか私も推薦されて副委員長になってしまった。ある女子を見ると、私の視線に気付いたのかバカにするように笑う。

むかつく、私の静かで目立たない学校生活が無くなった。何もかも嫌になった私はホームルームが終わっても帰りのしたくもしないで座っていた。

そんな時、彼が声をかけてきた。もう私たち以外は全員帰ったようだ。

「はじめまして？」

「……」

「これから一緒にクラスの委員をやるわけだから仲良くなった方が良くと思うんだ」

「……」

いつも通り無視した。話すのが嫌だった。けど、彼は諦めなかった。

「えーと俺の名前は知ってるよね？」

私は黙って頷くと、彼は凄く嬉しそうに微笑んだ。

「黒川さんってあってるよね？」

今度は私の名前を言ってきた。少し驚きつつ頷く。彼は私の名前を知っていた。

「下の名前はなんて言うのかな？」

「〇〇〇」

とっさに声が出ない。小さい声になってしまった。今日学校に来てから一言も喋ってない事に気付いた。

「え？」

やっぱり聞こえなかったようだ。自分にイライラする。鞆からメモ帳を出して名前を書いた。

「あーあさみね」

「俺の下の名前は知っている？」

私は首を振る。本当は知っているのに、なに私は嘘吐いてるんだろ。

彼は、私が名前を書いたメモ帳に自分の名前を書いた。

何でだろうか？いつの間にか二人で、喋りもせずにメモ帳を交換しながら夢中で筆談をしていた。私は自分の事を話すのが凄く嫌いだった。なのに自分の事や家族の事など書いていた。多分彼が何気なく自分が母子家庭である事を書いたから。私はさすがに例の事を

書くのを避けたけど、たいした事無いんじゃないかと思えた。

いつの間にか外が暗くなっている。私たちは帰る事にした。

二人並んで校門から出ようとした時に、ふと、さっきの出来事を思い返す。急に可笑しくなった。私は笑いながら思い切って言う。「あんた変わってるね」

彼はビククリしているみたいだった。彼は衝撃から立ち直ったのか、すくと笑顔になって、笑いながら言った。

「おまえもな」

私も笑いながら返す。

「そのとうり」

あゝ私はやっぱり強がっていたんだ。この私が作った壁を破ってきてくれる。誰かを待っていたんだと気付いた。

彼と話しながら家に帰る。そして私の家の前で彼と「また明日」と言って別れた。

いつ以来だろうか……。明日が楽しみになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9347b/>

遙か彼方

2011年1月12日23時12分発行